女歌人小論

女人短歌会編

女歌人小論

女人短歌会編

短歌新聞社

女歌人小論

1987年1月30日初版発行

著者代表　長沢美津

編集委員　女人短歌会
〒177　東京都練馬区関町北2—7—11

発行者　石黒清介

印刷所　有限会社ニッカ

発行所　短歌新聞社

〒166東京都杉並区高円寺南4—43—9
振替口座　東京5—21683
TEL　(03)　312—9185

1092-000497-4362　定価2000円

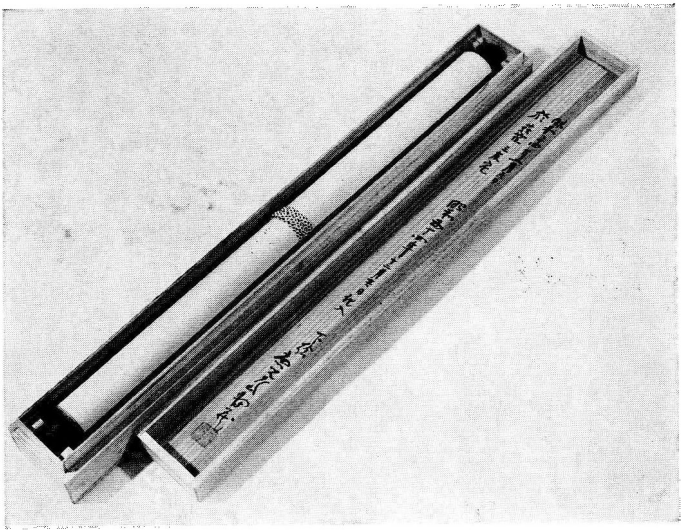
女人短歌宣言

短歌創作の中に人間性を探究し、女性の自由と文化を確立しよう

女性の裡にある特質を生かして、新鮮で豐潤な歌を作らう

傳統と歴史の中に生きてゐる女性美に、新時代性を積み重ねて成長しよう

同時代の女歌人の相互研鑽と新人の發見に努めよう



昭和五歌人合作之歌

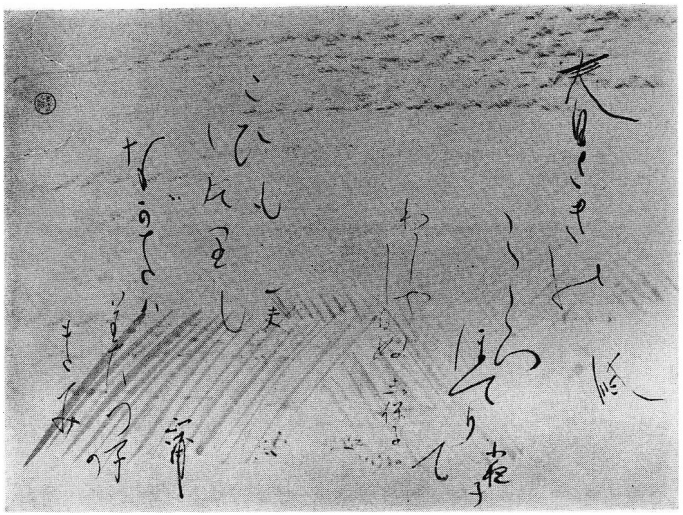
昭和二十四年二月六日

於荻窪三友宅

昭和五十四年十二月吉日記入

下絵・函書　鹿児島寿蔵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



春さきの　修

こころ

ほてり　小夜子

て

わしや

しらぬ　志保子

こひも　一夫

したりし

ながさは　正爾

美つ子

の

きみ

女歌人小論

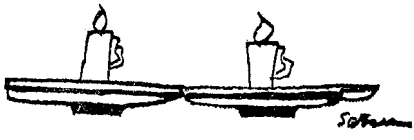
目次

女人短歌と折口信夫……長沢　美津……七
北見　志保子……平中　歳子……六三
川上　小夜子……雨宮　雅子……八一
阿部　静　枝……樋口　美世……九九
五島　美代子……森岡　貞香……一一九
水町　京　子……佐久間裕子……一三八
片山　廣　子……清部千鶴子……一五九
中原　綾　子……辻下　淑子……一七九
初井　しづ枝……林　丕沙子……二〇〇
（付各略歴）

三つの素描……塩川三保子……二二
創刊前後の思い出……津田八重子……二七
多くを学ぶ……岡山たづ子……二二
あとがき……二九

宣言　女人短歌創刊号
写真　創刊準備会寄せ書
撮影　小方　悟

女歌人小論



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

女人短歌と折口信夫

―発刊のころまで―

長沢美津

女人短歌は集団として出発し今年は三十六周年を迎えた。いつも女性の歌の本質を求めつつ現在もその途上にある。発刊のころまでのことを今回は記しておくことにする。

折口信夫と女人短歌の関係は、私の知っている範囲では古泉千樫の生前にまで溯る。更に北見志保子・水町京子にあっては歌誌「日光」の投稿者としての親洽があった。

私が師古泉千樫の所に参じた大正十五年は千樫中心に青垣会が結ばれようとしていた。女性では三ヶ島葭子・北見志保子・水町京子であった。私は目白を卒業して三月に帰郷し結婚して十一月に出京した時は結成されており、会員となることを千樫より勧められた。「青垣」という歌誌は昭和二年千樫没後、追悼号を創刊号として出発した。

千樫は歌集としては生前に選集である『川のほとり』一巻しか出さなかった。没後『屋上の土』

（昭和三年）装幀・森田恒友『青牛集』（昭和八年）装幀・平福百穂、この二集が改造社から出され共に巻末記を大熊長次郎が記している。この間に随想録『随縁鈔』（昭和五年）装幀・津田青楓・追い書きを釈迢空が執筆しこれも改造社から出版された。この三者の集名は何れも千樫自身が選び早くに発表しながら遂に取りかからずに終ったものである。今この随縁鈔の追い書きのなかから少し抄出をする。

「あらゝぎ」同人中私の最初に親しみを感じたのは千樫の作物であった。後『馬鈴薯の花』時代の赤彦に溺れる様になっていた。其でも千樫には千樫としての尊敬を持ち続けていた。

「あらゝぎ」の寄り合いに出なくなってから、二年目に、千樫の久しい顔を見たのは渋谷の学校の応接間であった。千樫はもう健康も以前の様ではなかった。その白い顔に潮した赤みも不安な鮮やかさを持っていた。「日光」の快い投書家にならないか、と慂めに来たのであった。白面の書生であった私を忽「あらゝぎ」同人の末座に加えてくれた赤彦の知遇の感謝を忘れぬ為に、長い二年間に亘って言いたいことの口をつぐみ、何れの派の歌人の顔も見ないで居た。が直観性の鈍ってくる年頃を痛感していた時だった。これをもり返すには、少年時代からなじんだ歌に縋る他はない。「あらゝぎ」へは忍び難い気もするが、今一度短い様式に、戻りたくてたまらなくなった。千樫の来訪の本意は、そんなことではなかったけれども、此機会に、千樫に申入れようと決心した。

この時アララギからの日光への参加者は千樫・迢空・石原純で純に原阿佐緒がしたがった。阿佐緒と葭子は行動を共にした。千樫の国学院に迢空を訪ねた主目的は阿佐緒と葭子の問題であったので、迢空にも同時に働きかけたわけである。

随縁鈔一巻・編纂の責任はすべて私が負うて居ります。これが出来上るまでの辛労は私が積んだのではありません。……全く故人の門下の強い報謝の志から出た成迹であります。

とあり、大熊長次郎・水町京子らの骨身を惜しまない熱心さを私はまのあたりみていたわけである。夭折した千葉公雄も遺著のために尽瘁したのであった。

千樫逝去のあと女弟子は迢空につくようにとのいいのこしがあった。三ヶ島葭子はすでに亡く女弟子といっても水町京子・北見志保子と私であった。京子・志保子は「草の実」を出しており、やがて志保子は「月光」を京子は単独で「とほつひと」によることになる。そのかげに迢空のあったことはいうまでもない。一方に昭和三年に「ひさぎ会」が成立している。これは女歌人の集まりで機関誌は持たないで昭和十三年まで続いた。

一、ひさぎ会と命名のこと
一、春秋二度の会を催すこと
一、新進の人を会員として推薦すること

第一回の記録に

四賀光子　今井邦子　岡本かの子　茅野雅子　杉浦翠子　狭山信乃　原阿佐緒　北見志保子
水町京子　川上小夜子　横田葉子　長岡とみ子　杉田鶴子　阿部静枝　川端千枝　中河幹子
片山廣子　尾崎孝子

等の名があり第二回より新人の推薦となった。このときに牧元（福田）たの子・中島（窪田）鉦子・長沢美津が加わった。協議事項として会費の件、会の仕事などが記されている。研究項目として明治短歌革新後の女流作家評伝を作ること。各自研究したき人を申出ることとあるが、その次の記録には歌人評伝については具体案に至らず、女流年刊歌集出版についての議出つ。共々懸案として散会。とあり年刊歌集の方はその後尾崎孝子によって刊行実現の運びとなった。

昭和九年杉浦翠子「短歌至上主義」十一年今井邦子が「明日香」を創刊し主力的存在が結社誌に移行し、社会情勢も変わり、時局献金の件相談、歌壇出征遺族への慰問等のことなどあり最後に岡本かの子の再入会とあるのをとどめとして記録は終っている。一冊の和綴じの部厚い帖面の五分の一ほど使用したものを昭和二十三年に女人短歌会に引きつがれ、廃棄のひさぎ会代表今井邦子名儀の安田銀行の通帖と共に現在女人短歌事務所に保管してある。

—女人短歌会の成立—

女人短歌が発足して五年目に折口信夫は長逝された。この間に女性歌が辿ったあとは目をみはらすものがあった。世にいう女歌の興隆期に向った。

昭和二十三年二月に水町さんから祐天寺の北見さんの処で「定型律」と「とほつひと」の合同で折口先生から話をきくから「青垣」の人を誘って参加してほしいとあり、その会は二月二十二日に催された。当日はそのころ「望郷」という雑誌に関係していた川上小夜子さんも加わった。

演題は「与謝野鉄幹の歌について語る」で集った大方は女性であった。八畳と六畳の間の襖をはずした二部屋にわたりほぼいっぱいの聴き手で、講師は日本机の前に坐って話をされた。当日の控の要旨によると

一、アララギは歌を文学的でなくした。その点明星は文学的であり芸術的であった。ために若いうちの情熱のあるときでないと一たん頂点に達したあとは発展しない。

二、明星は大事な人々を失った。それは寛という人は非常に敏感なために弟子のよいところを取ってしまった。アララギの強さは次に控えている選者を刺戟した。短歌は短い情熱で継続出来る。老年にも可能な芸術といえる。

三、アララギで芸術的であった人は千樫に憲吉である。千樫は怠け者であったから一時に力を出し切らなかったので最後まで衰えなかった。憲吉は芸術を捨てたところに（病気のため）まで行って自在の境地を得た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.